

## 本田実先生が伝えたかったこと

大久保 英 哲

金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部学長

2022年7月31日、本学特任教員（最後は非常勤講師）をお願いしていた本田実先生が69歳の若さで逝去されました。数年前からステージ4の肺がんで、治療・闘病を続けてこられ、少しずつ授業コマ数を減らしていただきましたが、最後まで「基礎の国語Ⅰ」をご担当いただきました。亡くなられたのは前期終了直前でしたが、シラバスはもとより、15回分すべての授業資料や課題、試験問題に至るまであらかじめご準備いただいていたので、谷畠学科長が代行する形で授業を終了することができました。去り際の見事さと潔癖さは、自ら尊敬すると語っていた吉田松陰を彷彿させ、教育者として職に殉じられたという思いを強くいたしました。

本田先生は1977年、星稜高校へ国語教師として赴任されて、傍ら20年間野球部部長として山下智茂監督とともに部員を育ててこられた方です。松井秀喜選手もその一人です。ノックなど技術指導も一から学んで自らグラウンドに立つなど、何事にも率先垂範して行動に移す陽明学を信奉する教育者でした。星稜高校では副校長として定年を迎えられ、2013年に本学短大部特任准教授としておいでいただき、「基礎の国語Ⅰ」「美しい日本語」など国語学関連の科目のほか、「クラスコミュニティ」「ゼミナール」「道徳教育の理論と方法」（全学教職科目）など、全部で13科目の多きをご担当いただきました。丁寧で分かり易い授業は学生たちにも人気で、本田ゼミは学生たちの希望者も多かったようですが、先生はクラスを増設してでも希望者はすべて受け入れてこられたとのことでした。

私は2015年から金沢星稜大学特任教授として着任しましたが、その後、時折A館エレベーターで、背筋がまっすぐ伸び、日焼けした顔に、眼光炯炯として威厳に満ちた先生と何度かご一緒させていただきました。目礼程度で言葉こそ交わしませんが、只者ではないと思わされたことを思い出します。それが本田先生でした。

2020年、短大学長を拝命、その後何度かじっくりと話し合う機会がありました。その中で、本田先生は自らが吉田松陰と森信三先生を信奉し、大きな影響を受けておられると伺いました。恥ずかしながら、私はそれまで森信三についての知識は皆無でした。

本田先生は長年に亘って高等学校教育の現場に立たれ、教育法規や学習指導要領を熟知され、その上で独自に工夫された教育内容と方法を実践してこられたことは言うまでもありません。ご担当いただいた全学教職科目「道徳教育の理論と方法」のシラバスを見ると極めてオーソドックスであり、先生独自の主張や理論は特には見られないといつてよいでしょう。公教育というのは一定以上の逸脱を許容しませんので、本田先生もその範囲内で慎重に授業をなさっておられたことが分かります。

けれども、私学としての独自の教育理念「誠実にして社会に役立つ人材の育成」・「明日輝く女性になる」を掲げる本学女子短大で、しかも学習指導要領の制約を受けることのない授業では、本田先生の面目約如というべき姿を見ることができます。枠としては必修科目とはいえ、全ての専任教員が同時開講し、学生がその中から自分の興味関心に合わせて選択することができる「ゼミナール」は事実上選択科目です。2014年度から2020年度まで開講された「本田ゼミ」シラバスには、教育者本田実先生の思いが堰を切ったかのごとくほとばしり出ています。

### 「本田ゼミ」授業の意図

二度ない人生において、「女性」として「生」を受けたことに深い幸福感と感謝の念を感受できることを願って。

学生から社会人へ。社会人であると同時に、いずれは家庭を持ち母へという道を歩むことになるであろう。母となった瞬間から、生涯を通して一人の立派な社会人を育てる教育者となるわけです。そこで求められるのは女性として、母としての教養です。言い換えれば、情感・感性などが吹き込まれた人柄や人格、品性と言ってもよいでしょう。女性の大きな特性は「情」です。人間の温もりです。

そのような女性が生まれながらに持つ「母性」に気づき、さらに深め磨きあげるきっかけになることを願って行います。

本科目では、女性として自己個人を修める「自己教育」への道筋を示す教材として森信三先生の「幻の講話」「女性のための修身教授録」をテキストとし、含蓄のある文章に触れ、それが教養への広がりにつながる授業にしたいと思います。

いくつか補足しておきます。

森信三（もりしんぞう、1896-1992）は愛知県知多郡に生まれ、2歳で半田町（現・半田市岩滑地区）の森家の養子となります。1920年広島高等師範学校英語科入学、1923年京都帝国大学文学部哲学科に入学し、西田幾多郎の教えを受け、卒業後は同大学大学院に籍を置きつつ天王寺師範学校（現大阪教育大学）の講師となります。1939年に旧満州建国大学に赴任しますが、敗戦後の1946年帰国。1953年神戸大学教育学部教授に就任。退官後の1965年には神戸海星女子学院大学教授に就任。腰骨を立てる姿勢教育から始める「立腰教育」（りつよう・きょういく）を提唱し、1975年「実践人の家」を建設。1992年、96歳で没しています<sup>(1)</sup>。

西田幾太郎と同じように、西洋哲学と日本の思想を止揚して新しい教育哲学を作り出そうとした人物であったとすることができます。

上のシラバス中に、テキストとして指定されている森信三『女性のための修身教授録』は、1936（昭和11）年4月から翌3月にかけて1年間、大阪府女子師範学校本科第一部3年生に対して行われた「修身」の講義録を現代文として採録編集したものです<sup>(2)</sup>。

つまり、戦前の「良妻賢母主義」を基軸とする女子師範学校での修身教育の内容です。シラバスの冒頭「二度ない人生」というのは、「人生二度なし」という森の世界観を表す用語を踏襲したものでしょう<sup>(3)</sup>。

しかし本田先生とて、戦前の女性のための修身教育をそのまま現代に再現しようとは思っておられなかったのではないのでしょうか。

戦後の教育改革に伴い、男女共学、六三三制が原則となり、個の尊重、男女同権、現在ではLGBTQといった性の多様性を尊重するなど、様々な生き方や価値観が並立、錯綜・混在する現代社会となりました。私個人もそうであるように、人は皆、親も教師も含め大人一般とて何が正しいのか、道に迷いながら生きているのが現実です。そのため、子ども世代に対して、「何を選ぶかはあなたの自由です。あなたの好きにしてください」と下駄を預けるしかありません。教育もその例にもれません。

ある幼稚園の先生からこんな話を伺ったことがあります。大学を出たての若い先生「お絵描き」で、子どもたちに「みんな好きな絵を描いていいよ」と提案。最初こそ子どもたちは「わーい、やった！」と喜んでいるものの、間もなく「何かいたらいいかわかんない」と半べそ状態。相談を受けたベテランの先生、「間もなく母の日だからね。お母さんの一番好きな笑顔を書いてあげよう」。この一言で子どもたちは生き生きとお絵描きに取り組むというのです。

大人にとっても自由はなかなか扱いにくい。人生経験の乏しい学生にとってはなおのこと。「自分が何をしたいのか。将来自分がどんな職に就くべきなのか」。進路支援課のスタッフが毎年毎年学生たちと大格闘するのは、自由の大海原の中で、学生自らが目的や行き先を決断し、行動に移すまでに必要な膨大なサポートの数々なのでしょう。学修期間が2年しかない女子短大生にとってはなおさらです。「私は何をどう考え、生きていくのか」「女性としてどう生きていくのか」は学生たちにとって、関心がないはずのものではありません。もちろん、それが日本人であるとか、女性であるとかといった決定論的な規範として押し付けられることには猛反対するでしょう。しかしながら、親世代の生き方をきちんと説明し、子世代に情報提供することはやはり必要なことなのではないか、それらの判断資料が示された上での選択の自由なのであろうと私は考えています。

本田先生のゼミでは、戦後日本が過去のものとして否定した、自分の祖母ないし曾祖母、あるいはそれ以前の日本の女性たちが受けた時代の教育とそれに基づいた考え方や生き方の長短を現代と対比しつつ提示し、最後にやはり自分の意志で自覚的に選択するのだ。合わせてその決断には大きな責任が伴うし、また努力の継続も必要になるのだ。その全プロセスが「自己教育」なのだと伝えたかったのでしょうか。

次の写真は、2017年、本短大ホームページに掲載された「本田ゼミ」の伊勢市での研修風景です。「立腰」で正座する学生たちの姿勢の美しさと、講話に聞き入る「眼差し」が

印象的です。学生たちにとっては、古い価値観への抵抗はもちろんあったでしょうが、現代の教育論ではなかなか扱いにくい事柄についての対比的な分かりやすさ、実感・体感として得られる達成感、何よりも本田先生の率先垂範的行動力が学生たちからは評価され、支持を受け、ゼミへの参加希望者が多かったのではなかろうかと考えています。

本田実先生。まことにありがとうございました。あなたは「学は人たる所以（ゆえん）を学ぶなり」という吉田松陰の教えを実践した教育者でした。心からのご冥福を祈ります。



星短からのお知らせ 2017年4月11日

「本田ゼミ 人間学塾・中之島 伊勢宿泊研修に参加」より

#### 引用参考文献

- (1) 森信三『女性のための修身教授録』、致知出版社、2009（2刷2014）、「著者略歴」
- (2) 前掲(1)。編集採録者は寺田一清。「編集の経緯」（283頁該当）による。
- (3) 前掲(1)、10頁。「『人生二度なし』これ人生における最大最深の真理なり」



## 本田実先生へ追悼の意を込めて

鍋 谷 正 二

星稜中学校・高等学校校長

本田実先生から様々なことを学ばせていただいた一人として、追悼の意を込めて、本田先生が語られたご自身の言葉の一部をご紹介します。

本田先生ご自身が50代を迎えた平成16年の2月に60代の夢として、「小学生を相手に古典を通して、人間の生き方を語る塾をやりたい」と考えていたそうです。その後、平成23年12月、「60歳を迎える前に、そして60歳以降の生き方へ」として、人との縁をさらに広げたい。本物を求め続ける。さらに勉強を続けながら、その都度、自分の人生をまとめる。「60歳からがおもしろい」を実践してみようと思う。60歳は還暦、基本に戻って初歩から学び直そう。自分の活動を外に向けて、縁のつながりから学びの場を広げよう。と実際に様々な活動をされていました。

「おまえにとって本物とは何だ」と問われたら、(理屈抜きで)人として大切にすべきものを持ち、実践している人「導くとも知らで、後ろ姿で導く人」である。

安積得也(詩集「一人のために」)少し言葉は違っていたが、星稜高校奉職2年目に、ふと出会った言葉。以来、机の上に写した紙をずっと置いていた。「教える人貴し 教えるとも知らで からだで教える人 さらに貴し 導く人貴し 導くとも知らで うしろ姿で導く人 さらに貴し」

平成25年6月に星稜中学校の1,2年生を対象に「道徳」の授業を行い、その後、道徳とは何かと題して、次のようにまとめられています。正しい判断力と美しい心情と強い意志力をもって、正と善を実現する性格は、毎日の行動習慣によって形成される。道徳教育は、生活の全領域において、行動のすべてを通して行われなければ、効果を期待できない。道徳教育は、学校・家庭・社会における生活の全体を修行の場として、適切な一貫した指導をすることによって可能となる。

平成26年にご自身が書かれた文章より。「自分が新しく学び始めたことを、目新しいものとして食いついているわけではない。それぞれの学びの場では、もちろん、これまで気づかなかった視点であったり、考え方であったり、知らない世界を知ることができたり、吸収できるものはたくさんあるに間違いはない。しかし、そういう場で学ぶ機会を持ったことで、気づいたことがある。それは、何らかの志を持った人たちが集まる、その場の真剣さ、良い意味での貧欲さ、積極さ、といった空気を実感できる喜び、楽しさである。そして、そこに集まる人たちは、年齢も性別も職業もすべて別々であるが、ひとつ共通点がある。それは、学んだことを自分一人のものとしてせず、社会・教育・家庭・地域など、自分の周りの人や組織に還元、あるいは感化したいという、強い思いを持っていることである。まさに、「朋遠方より来る有り。亦楽しからずや」である。今年4月に教職について40年

目を迎えた。特に感慨があるわけでもないが、そのことに気づいたことには意味があるように思う。4年後の65歳でまた節目を迎える。そこから先5年はどこに身を置いているかは分からないが、どこにいても、おそらく同じ道を歩いているような気がする。ただ、今の気持ちとしては、せめて、背筋を伸ばして歩いていたいたいと思っている。」

昨年（2021年）に本田先生のお父様が亡くなられ、その葬儀の挨拶にと本田先生のご子息とともに校長室にお越しいただいた際に（当時ご自身も闘病されていたころ）凜としたお姿で、こんなお話しをされていました。「生きざまは背中で見せるものや」と。本田先生が亡くなられる数日前に、本校近くをスタスタと歩かれていて、本校教頭がたまたま出合いご挨拶したそうです。最後まで学び続け、後ろ姿で導く人でありました。 合掌

## 本田実先生を偲んで

辻 建 一

金沢星稜大学教養教育部教授

約45年前、まだ学生のような初々しさを残す爽やかな好青年風の先生が星稜高校に入ってきました。それが本田実先生でした。今稲置学園に勤めている教職員のなかでも、私は若き日の本田先生の姿を記憶している数少ない一人です。その頃小松投手を擁した星稜が甲子園で活躍したときの野球部部長だった多田直光先生と、私は星稜女子短期大学で一緒に仕事をする事になりましたが、その後野球部部長を務められた本田先生ともまた短期大学部で一緒することになったことに、縁の不思議さを感じていました。なお、松井秀喜選手が活躍した頃が本田野球部部長時代と重なっており、本田先生と職場の同僚となつてからは、コピー室で昔の星稜野球について懐かしく思い出しながら、おしゃべりする機会がたびたびありました。明德義塾戦での松井選手の5連続敬遠については、野球のルールの枠内での作戦だからと明德の馬淵監督に理解を示す私に対して、本田先生の方は高校野球にふさわしくない行為だと否定的な見解を述べられていました。その数年後、(ややマニアックな星稜野球ネタですが) 中日からのドラフト上位指名が確実視されていた強打者の東宏幸選手が結局指名されずじまいに終わったときのいきさつなども、コピー室にて興味深く拝聴しました。数々の名勝負を繰り広げたかと思えば、また色々悶着も起こす星稜野球部ですが、スポーツは話題性があってなんぼのものと思います。本田先生は天国からずっと、今後の星稜高校の活躍をあたたく見守り続けてくれることでしょう。

## 本田実先生を偲んで

谷 畠 範 恭

金沢星稜大学女子短期大学部経営実務科学科長

私が本田先生とはじめてお会いしたのは、先生が本学にいらした年の4月1日第1回教授会です。星稜高校で副校長まで務められた方がいらっしゃるということで、心なしかいつもより緊張感のある教授会でした。教授会では、新任の先生方のご挨拶があり、本田先生も挨拶をされました。本田先生は低いトーンで穏やかにご挨拶をされ、さすが高校で長らく教鞭をとられていた方の話し方・雰囲気は違うなと感じました。

本田先生は講義の準備をする際、15回分の準備をすべて初回の講義前に終えていたようです。私が「途中で内容が変わったらどうするのですか?」とお聞きしたところ、「全部作り直します。去年は講義の難易度が学生に合っておらず、途中からすべて作り直しました。」とおっしゃっていました。私は当時、講義の前日までに準備をしていましたが、本田先生のお話を聞いて頭が下がると共に反省をしました。今では、本田先生には遠く及びませんが、初回講義前にできるだけ準備を終わらせるようにしています。

本田先生は、普段、本館8階の研究室にいらっしゃいました。教務的なことでご相談にうかがうといつも丁寧にご対応いただきました。デスクにはチョコレートのお菓子がよく置いてありましたね。チョコレートを口にしながら、学生のレポートを添削している姿が今でも目に浮かびます。本田先生は常に学生のことを第一に考えていらっしゃいました。私も本田先生を見習い、学生のことを第一に考え、より一層精進して参ろうと思います。

ご生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。



## “人を残す”ことに生涯を捧げた本田実先生

山 本 航

金沢星稜大学女子短期大学部副学長

明治から昭和初期にかけて活躍した医師で、政治家でもあった後藤新平氏は、“金を残して死ぬのは下だ。事業を残して死ぬのは中だ。人を残して死ぬのが上だ”という言葉を残しています。

本田実先生が亡くなられたとき、その言葉が頭に浮かびました。

本田先生の口からご病気（肺がん ステージ4）のことを聞いたときは驚きましたが「すぐに死ぬわけではない」と、ご本人もさりと口にするほどでしたので、私もそのときは治療を続けていけば寛解するものと信じていました。

治療が始まり、入退院とリハビリを繰り返しながら、「いのち（生命）を削って授業をしている」という先生の言葉には、底知れない覚悟と気迫さえ伝わってきたものです。

通夜の会場で「山本先生…」と声をかけられたので振り向くと、一人の女性が歩み寄ってきました。星短の卒業生だろうとは思いましたが、マスクで顔が半分隠れていたこともあり、「N.S（以下『N』という）です」と名乗ってもらって初めて数年前の卒業生だとわかりました。本田先生のゼミ生だった一人です。

式場でのNはハンカチで目尻を何度も拭いながら、「(本田)先生って、なんで死んだん？」と聞いてきました。「がん（癌）だったんだよ…、先生は最後まで…すごく頑張ったんだよ…」と答える私もつられて涙声になっていました。

入学当時のNは、つけんどんな物腰で、言うことを素直に聞くタイプではなく、いわゆる“跳ね返り”でした。指導教員だった私には扱いづらい学生だったのですが、今思うと、「女性の修身学」というテーマの本田ゼミを希望したところに、私にはわからなかった彼女の学びたい志が潜んでいたのかもしれない。

Nの指導を引き継ぐことになった本田先生には、私がうまく指導できていない実情やNの母親との面談記録などをお伝えしました。本田先生は“任せてくれ”と言わんばかりの笑みを浮かべながらお聞きになっていました。

本田先生ならこれまでの経験から、Nの長所を引き出して伸ばしてくださるだろうという期待と、どのような指導をされるのかにも興味がありましたので、折に触れNの様子を尋ねたものです。そのたびに「最近、Nは変わったよ」と、やや自信ありげにおっしゃりながら微笑まれた顔を今もはっきりと覚えています。

実際、Nは私を見つけると「せんせい～」や「お～い」と言葉をかけてくれるようにな

りました。そして「私がゼミ長よ。びっくりやろう！」と、うれしそうに話し、明らかに以前とは意識が変わっていることが伝わってきました。本田先生がNの持つポテンシャルを信じて任せたことは想像に難くありません。

本田先生は、“跳ね返り”のNの本当の芯の強さを感じ取っていたのでしょう。以来、Nからは、つけんどんな物腰が消え、入学時からこだわっていた自動車関連の会社にターゲットを絞って就職活動をし、内定を獲得したのです。卒業時には私に「先生にも感謝しとるわ」と、入学当初は想像もできなかった言葉をかけてくれました。卒業後に用事でNが来訪したときにも声をかけてくれましたが、その話しぶりからNは職場でも仕事を任せられ、周囲から頼りにされる存在になったことが伝わり、働きがいを感じている様子でした。

本田先生、あなたはもしかすると、ご自身に残された時間を十分おわかりになっていたのではないですか？それでも最後の瞬間まで諦めずに奇跡を起こせると信じ、笑顔を絶やさずことなく、ご家族から贈られたウォーキングマシンに乗って地道にリハビリに励み、先々の授業の準備も怠らずに資料作りをなさっていたのですね。そして、“人を残す”ことを使命とし、若い人たちを教え導くために塾（つくよみ塾）を主宰したのも、本田先生のお考えになった「恩送り」だったのだと、今は思えます。

本田先生、あなたと電話で話すたびにすっかりさせていただいたこと、お送りしたメールの返信で励まされたこと、ずっと忘れません。

通夜のときの「(山本) 先生が死んだときも、絶対に葬式行くし…」と二度三度私に言ったNの言葉を思い出すと、その言い回しが彼女らしくて妙に微笑ましく、その彼女の後ろで本田先生が顔をくしゃくしゃにして微笑みながら立っている姿が浮かび上がってくるのです。

本田先生、どうぞ安らかにお休みください。本当にありがとうございました。